

園児の食育行動目標としての箸使用に関連する要因

北川 千加良*¹⁾ 渡邊 智之*¹⁾ 森岡 亜有*²⁾ 末田 香里*¹⁾ 酒井 映子*¹⁾

【目的】園児の箸使用と家庭環境、生活習慣、食意識との関連を明らかにし、箸使用から園児の食育のすすめ方を検討した。

【方法】調査対象は愛知県T市の公立・私立を含む幼稚園4園、保育園8園の計12園に通う5歳児(幼稚園児206名、保育園児280名)とその保護者に対するアンケート調査の両データが揃うもののうち、箸使用の回答不備や欠損データを除く404名(回収率94.7%、有効回答率83.1%)とした。園児の箸使用は観察法および面接聞き取り法、保護者は留め置き法を用いた。調査項目は園児では食習慣などの18項目、保護者には食意識などの44項目を取り上げた。なお、同地区で平成25年同時期に実施した5歳児親子の食育調査との比較も行った。

【結果および考察】1. 正しい箸使用ができる園児は少ないことが確かめられた。2. 箸を正しく持てる園児の保護者では、こどもに箸の持ち方を教え、自分のこどもが箸を正しく持てることを認識しており、食事の時間を楽しみ、食事を残さないようにするなど、生活習慣の基礎づくりへの保護者の介入を認めた。3. 箸を正しく持てる保護者では、家族の絆を大切に、感謝の気持ちを育成するなど、こころの育みを重視するとともに、園児への箸使用教育や食事を残さないで食べるといった望ましい食習慣づくりも実践されていた。

【結論】園児の箸使用の食育は、家庭における望ましい食習慣の形成に寄与できることが確かめられた。正しく箸が持てる5歳児は30%弱と少ない結果を踏まえて、箸使用の意義と役割を学ぶ親子揃っての箸使用教室や箸コミュニティ組織づくりなど、多様な教育機会と継続的な実践活動の必要性が示唆された。

キーワード：食育行動目標、箸使用、家庭環境、生活習慣、食意識

1. はじめに

子どもを対象とした食育は、食事や排泄、睡眠といった基本的な生活習慣を獲得する時期である¹⁾といわれているように、発達段階に応じた時期に着目して展開することが肝要であると考えられる。また、家庭が食育において重要な役割を有していることを認識するとともに、教育、保育等における食育の重要性を十分に自覚し、積極的にこどもの食育の推進に関する活動に取り組むこと²⁾が食育基本法に明記されている。

さらに、食育には、わが国の伝統ある食文化に配慮しなければならないこと²⁾が掲げられている。幼児期は、家庭もしくは保育所・幼稚園等で過ごす時間が長く、食育の理念と幼児期の食育実践を通して、大人も積極的な食事への関わりを持つことが重要となる。

食文化の視点からみると、箸の歴史は古く、少なくとも紀元前5000年には中国で箸が使われていたことが確認されており、日本でも7世紀には箸が広まり、匙を使用した食事の時代から変化してきたことが分かっている³⁾。現在、世界にはおよそ30%の人々が、日常的に箸を用いて食事しているが、日本は世界で唯

*1) 愛知学院大学心身科学部健康栄養学科

*2) 愛知淑徳大学福祉貢献学部福祉貢献学科

(連絡先) 北川 千加良 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 愛知学院大学心身科学部事務局 連絡先0561-73-1111(代表) 内線番号(3480)

一、箸だけで食事を完結させる国として特異的である⁴⁾。

次に、箸文化が定着した要因として、温帯ジャポニカに収束された特殊な米文化が形成された⁵⁾ことがあげられる。膳上の食器を持ち上げて食べることも、日本が箸だけで食事を完結させるようになった理由である⁶⁾。また、箸は多彩な機能をもつ食具であり⁷⁾、箸を右手に持ち、左手に腕を持つことで食事が円滑に行えるようになった⁶⁾。さらに、日本の箸文化からは、感謝する気持ち、物事を大切にすることを、正しく箸を持つといった和食の美を味わう気持ちなどが継承⁴⁾されてきた。箸は日本人にとって「生命の杖」といわれる⁸⁾ほど、日常生活とは深い関係がある。箸は日本食には欠かせない食具として長く日本の食文化を支えてきた⁹⁾。このような、日本の日常食や風習などと箸使いとの繋がりを理解することにより、子どもに日本の食文化を大切にすることを育てるものとのおもわれる。

箸使いと発育との関連からみると、向井ら¹⁰⁾の研究では、箸の長さを自分の手の大きさに合わせることで扱いやすくしている。日本では「マイ箸」が普及した理由でもあり、家庭でも子どもの時から個人用の箸を与えられることで、家庭での自分の存在価値を示し大切に箸を扱うようになる⁸⁾。

箸を使うという動作は、食事をするだけでなく、道具を使う手の動作の基本形である¹¹⁾。1～2歳の幼児の手は薬指と小指の筋力が弱いため、意思に即して手の機能を自在に発揮することができない⁶⁾。5歳頃になると、手根骨の骨化核がほぼ揃い、かなり複雑な手首の動きができるようになり、訓練によって手を使う技術の習得が可能になる⁶⁾。広沢による保育園児の食事道具の持ち方に関する調査結果は、「スプーン→フォーク→箸」の順で使われていることを報告¹²⁾しており、これにより、「モノを握る」という手の動作が可能になった後に、指先の細かな動きを習得することが反映された¹³⁾。一色は、幼児期からの箸使いについて、「生活の基本的なしつけは、大脳が著しく発達する幼児期に決まる。この段階で手先の使用が十分でないと、大脳も順調な発達ができなくなることになる」と訴え、「幼児期からの箸使いは日本人の脳と手の発達に大きく貢献してきたといえる」⁷⁾と述べた。したがって、箸使いの教育は機能の発達に合わせた適切な時期に行うことが重要であると考えられる。また、箸使いは子どもにとって高度な技術であるからこそ訓練が必要であり、教える側と教えられる側とのコミュニ

ケーションが不可欠となる。

このように、幼児期の箸使いは食育として幅広い展開が可能である。食育の行動目標としての箸使いは、食事内容の改善、食文化としての食具の意義の理解と習得、親子のコミュニケーションの育成などの観点から、取り上げるべき重要な課題であると考えられる。

以上のことから、幼児期に習得する基本的な生活習慣の一つとして箸使いがあげられ、子どもに対する食育活動を通して箸教育を推進することが、子どもの健全な成長、文化の伝承などにおいて重要と考えられる。さらに、箸の適切な持ち方や箸使いには手間暇がかかり、経験を積み重ねて習慣化させることが大切である。

しかし、最近では食の欧米化、和食離れなど、食事のスタイルが変化したことにより、ナイフ、フォーク、スプーンを使用する機会が増すと共に箸を使用する頻度が減り、それに伴って、正しく箸を持てる幼児や青少年が次第に少なくなり始めている¹⁴⁾状況にある。

そこで、就学前の食育行動目標の一つに「正しく箸を持てる」をあげているT市において、子どもの箸使いの実態を明らかにし、子どもの箸使いと生活習慣および家庭環境、保護者の食意識との関連から、子どもの箸使いを推進するためのあり方を検討することを目的とした。さらに、子どもの発達段階に応じた箸使いについて、食育活動の一環としてどのような教育を展開するべきかについて検討を加えることとした。

II. 方法

1. 調査対象

調査対象は愛知県T市内の「こども育成課」管轄の幼稚園4園、保育園8園（認定こども園2園を含む）の計12園に通う5歳児（幼稚園児206人、保育園児280人）とその保護者が揃うデータとし、箸使いの回答不備や欠損データを除く404名とした。回収率は94.7%、有効回答率83.1%であった。

2. 調査期間

調査実施期間は、平成27年7月中旬から8月上旬である。

3. 調査項目

調査項目は、T市「こども食育推進協議会」により作成された「こども食育ガイドライン—就学前版—」において、小学校入学までに達成することを食育行動目標として掲げている①食事の挨拶をする、②正しく

箸を持てる、③食事のお手伝いができる、の3項目のうち本研究では②を取り上げることとした。

これに基づいて、園児に対しては箸使いと生活習慣に関するアンケート調査、保護者に対しては生活習慣や家庭環境および食意識に関するアンケート調査を実施した。

園児のアンケート項目には、園児の家庭における食育の実践度を評価するための18項目を取り上げた。保護者に対するアンケート調査は、家庭での保護者の食意識や園児の行動に関する40項目、箸の使い方についての4項目合計44項目を取り上げた。

4. 調査実施方法

1) 園児対象調査

調査者が調査対象園に出向き、アンケート調査項目について園児に対して個別に面接聞き取り式によって行った。箸使いは観察法により行い、調査員が園児に箸を実際に持たせて、正しく持てるか否かの判定をした。

2) 保護者対象調査

保護者宛てに各園から自記式のアンケート調査表を配布し、家庭において記入をしてもらった後、各園で回収した。

なお、園児とその保護者の個人情報保護のため、個人が特定できないようにアンケート調査表にはコード番号を記入しておき、回収後に園児と保護者とのアンケート調査の統合を行った。

また、同地区で平成25年同時期に実施した5歳児親子の食育調査の中から、園児の正しい箸使い、園児に対する保護者の箸使い教育、保護者からみた園児の箸使いに関する判断の3項目を取り上げて比較検討を行った。

5. 調査集計・解析

統計解析については、園児の箸使いと生活習慣要因および家庭環境要因との関連、保護者の箸使いと食意識との関連には χ^2 検定、また、園児の箸使いとその関連要因について総合的に検討するために二項ロジスティック回帰分析を行った。集計・統計解析にはIBM SPSS Statistics24を用いた。

III. 結果

1. 園児の食行動および箸使いの実態

1) 園児の食行動の実態

園児に行ったアンケート項目の中から、食行動の実態に関する15項目を取り上げた。斜線の項目はT市の食育行動3目標である。食事の挨拶は90%以上とほぼ実行されていた。食事の手伝いは80.7%であり、食事中的会話、残食、嫌いな食べ物などの状況と比較して高い比率となっていた。これに対して、正しい箸の持ち方の実践率は27.4%と著しく低く、食行動の項目の中でも課題として取り上げるべき項目であった(図1)。

2) 園児の箸使いに関する経年変化

園児の箸使いに関する経年変化は図2に示すとおりである。正しく箸を持てる園児は、平成25年で31.8%、平成27年では27.4%であり経年変化はみられなかった($p = 0.142$)。保護者の箸使い教育は、実施している者が平成25年で92.0%、平成27年では78.5%であり危険率5%以下で有意の差が認められた($p = 0.000$)。このように、箸使いを教育する保護者は2年間でほぼ10%と短期間に低くなっていた。保護者からみた園児の箸使いに関する判断は、正しく持てる園児が平成25年で62.1%、平成27年では

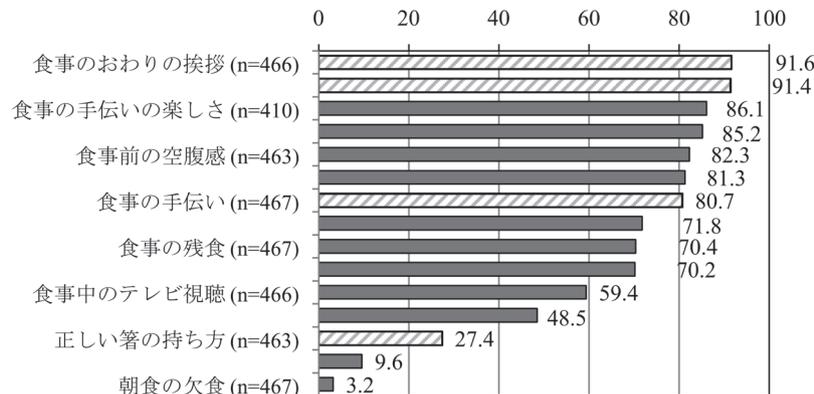


図1 園児の食行動の実態

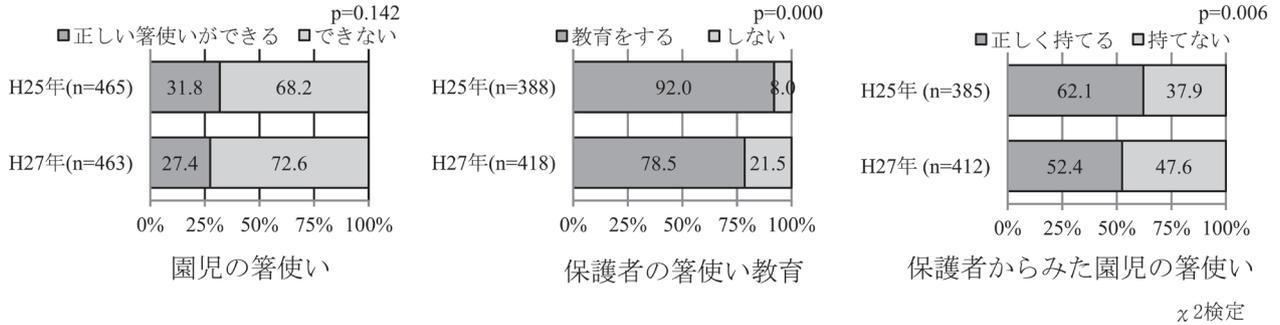


図2 箸使いの経年変化

52.4%と有意に低くなっており (p = 0.006), これは保護者の箸使いの教育の低下と一致していた。

3) 園児と保護者の箸使いの状況

箸使いの親子の状況については、園児、保護者ともに正しく持てる者が24.8%, 保護者のみ持てる者が56.0%, 園児のみ持てる者が3.9%, 園児、保護者ともに持てない者が15.2%であった (図3)。保護者が正しく箸を持てる比率は80.8%であり、保護者の正しい箸使いに対して園児で正しく箸が使える者はほぼ1/3と低くなっており、家庭での箸教育が行われていないことを示していた。

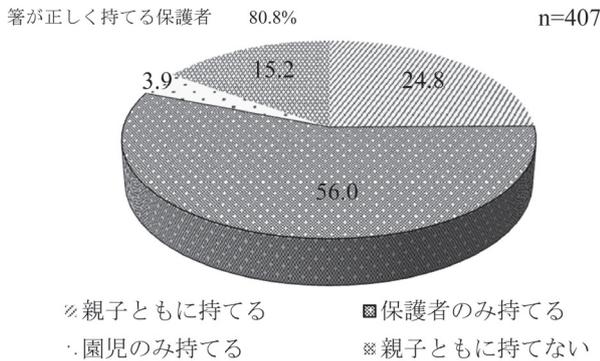


図3 箸使いに関する親子の状況

2. 園児の箸使いと生活習慣要因、家庭環境要因との関連

園児の箸使いの適否と生活習慣要因との関連をみると、正しく箸が使える園児では保護者が食事中に箸使いを教育している者が有意に多くなっていた (p=0.046)。また、箸を正しく使える園児は使えない園児よりも習い事をしている比率が高かった (p=0.041)。5歳での習い事は子どもの積極的な生活態度を示唆しており、正しく箸を使う行為と連動していた。さらに、有意の差はみられなかったものの、正しく箸が使える園児は9時前に就寝する (p=0.079) 習慣が形成されている様相がうかがえた (図4)。図には示さなかったが、正しく箸が使える園児はよく噛んで食べており (p=0.076)、マイ箸を持っている者が多い (p=0.065) 傾向がみられた。

次に、園児の箸使いと家庭環境要因との関連についてみると、正しく箸が使える園児は食事を楽しんでいる者が多く (p=0.016)、食事を残さないで食べており (p=0.031)、食事を楽しみにしているといった食事への期待が高いものが多い (p=0.022) ことが有意に認められた (図5)。このように、園児の食事への保護者の配慮があらわれている家庭環境となっていた。

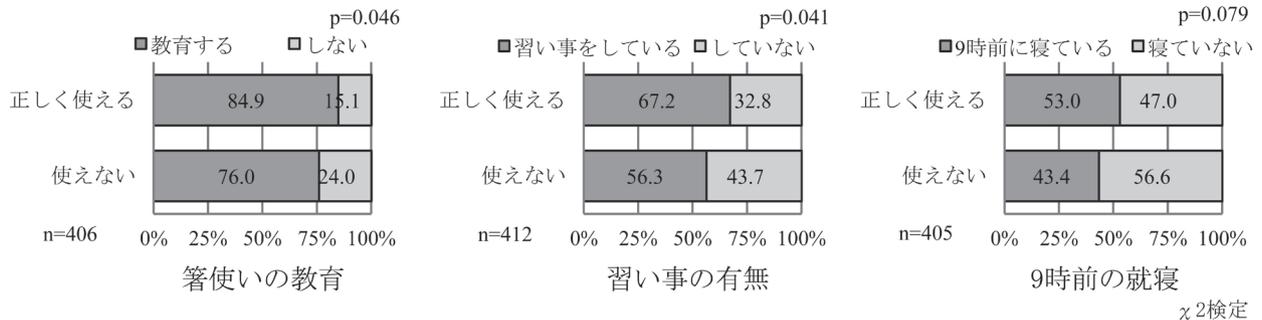


図4 園児の箸使いと生活習慣

3. 保護者の箸使いと食育に対する意識との関連

保護者が正しく箸を使えるか否かと保護者の食育に関する意識との関連を検討すると、保護者が正しく箸を使える者では使えない者よりも、食事によって家族の絆が強くなると考える者が有意に多くなっていた ($p=0.019$)。また、箸を正しく使える保護者では、感謝の気持ちを育成している者が多いこと ($p=0.001$) を認めた (図6)。正しい箸使いができない保護者は19.2%みられることから、食育に対する意欲の向上とあわせて保護者に対する箸教育の必要性が示された。

次に、園児の箸使いの適否と家庭環境、生活習慣、保護者の食意識に関する要因を総合的に検討するため二項ロジスティック回帰分析を行った結果、信頼度は高くなかったものの、「正しく箸が使える」に対する「正しく箸が使えない」のオッズ比が最も高かったのは、食事を楽しんでいる(食事の様子)の1.8倍であり、次いで、園児が食事を楽しみにしている(食事への期待)の1.7倍、保護者が正しい箸使いを教える(箸使いの教育)の1.6倍であった。一方、夕食を家族と一緒にしない場合や食事中にゲームをしている場合など、望ましくない食事状況ではオッズ比が低い傾向がみられた (図7)。

IV. 考 察

1. T市の園児と保護者の箸使いの実態

T市の「こども食育ガイドライン—就学前版—」における、食育行動目標「正しく箸を持てる」に着目し、生活習慣、家庭環境および保護者の食意識が箸の持ち方に与える影響について検討した結果、「正しく箸を持てる」園児は平成25年で31.8%、平成27年で27.4%であり、食育行動目標の達成度は低かったと考えられる。最近では食事の欧米化や外食率の増加などによって、箸を使用する頻度が低下していることが、園児が正しく箸を持てない要因のひとつであると考えられる。独立行政法人日本スポーツ振興センターの平成22年度児童生徒の食事状況等調査報告書¹⁵⁾では、箸の持ち方の図の選択肢から正しい選択をした小学生の割合は5割強、その保護者は76%であるとの報告がある。T市の園児ではその値を下回る結果となったが、本研究では調査員が実際に箸の持ち方を確認したことや対象児の年齢が異なることなどにより、正しく箸を持てる割合が低かったものと推察される。しかし、箸使いを習得すべき5歳児において正しく使える者がほぼ30%という実態調査結果は、子どもの食育の

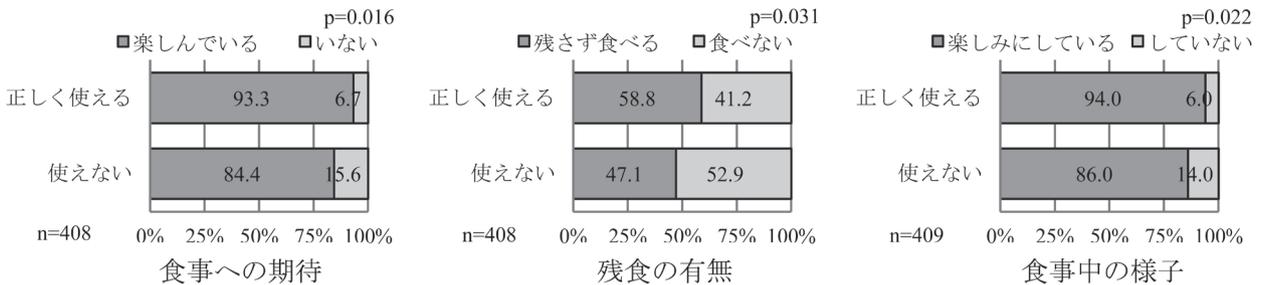


図5 園児の箸使いと家庭環境

χ^2 検定

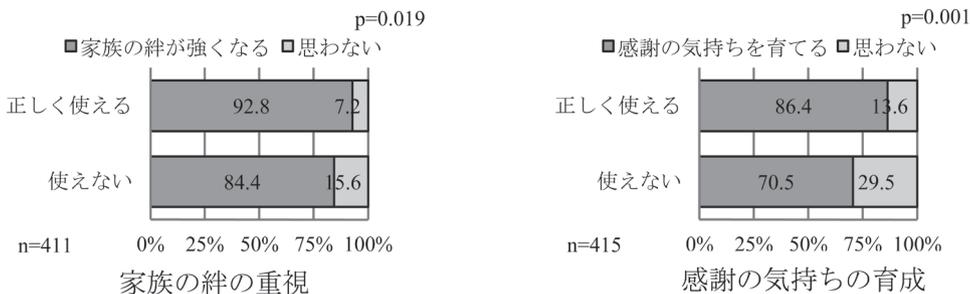
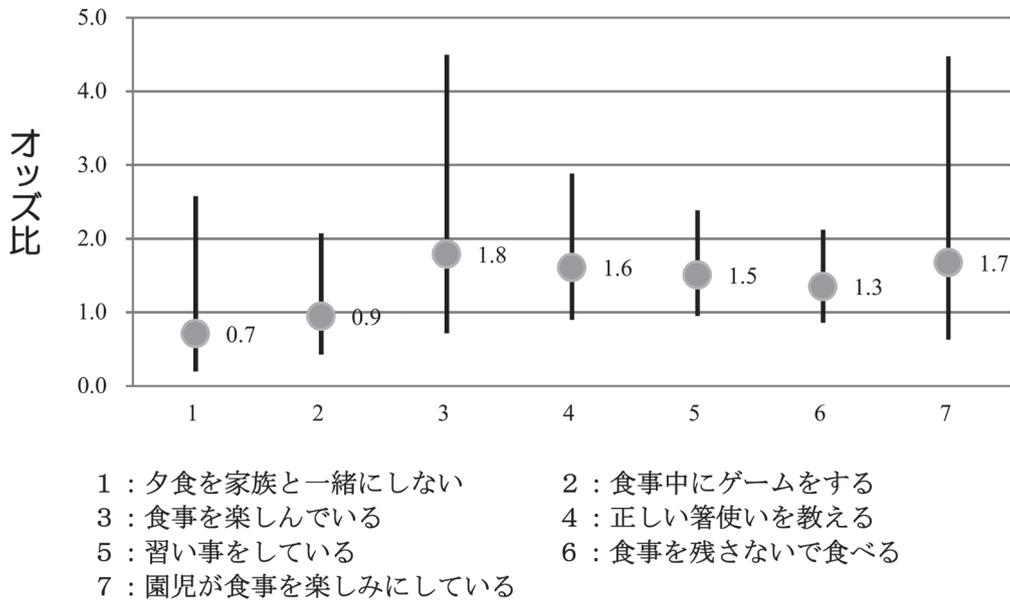


図6 食事に関する保護者の食意識

χ^2 検定



- 1 : 夕食を家族と一緒にしない
- 2 : 食事中にゲームをする
- 3 : 食事を楽しんでいる
- 4 : 正しい箸使いを教える
- 5 : 習い事をしている
- 6 : 食事を残さないで食べる
- 7 : 園児が食事を楽しみにしている

二項ロジスティック回帰分析：箸が正しく使える VS 箸が正しく使えない

図 7 園児の箸使いと生活習慣, 家庭環境, 食意識との関連

推進の上からみて深刻な状況であると考えられる。

保護者の園児への箸使い教育の実施の有無について、平成25年と平成27年の比較をすると、保護者が園児に箸教育をしている割合が有意に減少していることが確かめられた。平成27年の本調査では、正しく箸を持てる保護者が80.8%であり、平成22年度児童生徒の食事状況等調査報告書¹⁵⁾の76%よりは高い割合を示しているが、保護者の正しい箸使いは自記式のアンケートにより保護者自身が正しく持てるかを、アンケート用紙のイラストをもとにして主観的に判断しているため今回の結果に繋がったと考えられる。子どもが正しく箸を持てなくなった理由として、子どものモデルとなるべき保護者の正しい箸使いの比率が低いこと、また、保護者自身も正しい箸使いの判断ができないこと¹⁶⁾があげられる。また、箸使いの意義や役割を知らない保護者が増えた可能性があげられる。このように、保護者が箸教育の必要性を痛感していないことなども考えられる。保護者が園児に対する箸教育の向上をはかるためには、園児だけでなく保護者も箸使いの意義と役割を学ぶことが重要であると考えられる。

園児の箸使いに対する保護者の判断と園児の正しい箸使いの割合を比較すると、保護者の約半分しか箸使いの正しい判断ができていなかった。先行研究¹⁷⁾によると、こどもの箸の持ち方について、保護者の意識と指導頻度との相互関係をみた場合に、いつも箸の持

ち方を子どもに指導している保護者は、指導をほとんどしない保護者に比べて箸の持ち方がいつも気になると報告していた。本調査結果からも、保護者が子どもの箸の持ち方を気にかけていくことが重要であると考えられる。T市では箸を正しく持てる園児が30%程度である一方で、正しく箸を持てる保護者が約80%と多い現状を踏まえて、子どもの心身の健やかな成長や生活習慣の基礎づくりおよび日本文化の伝承のため、保護者とともに箸使いの教育に関係者が積極的に取り組むことが大切である。

2. 園児の箸使いと生活習慣, 家庭環境との関連

園児の箸使いと生活習慣との関連の結果から、正しく箸を持てる園児の家庭では保護者による箸教育が実施されており、箸教育が家庭で行われることの重要性が確かめられた。また、幼児期を過ぎ、就学すると箸の持ち方が鉛筆持ちと混同してしまうことから、癖のある持ち方から正しい持ち方に移行することが難しいといわれており¹⁷⁾、3～5歳の幼児期に正しい箸の持ち方を教えることが肝要であると考えられる。家庭においては幼児の成長に合わせた適切な箸教育を行うことが大切である。

しかし、箸教育をしない家庭が約20%みられることや保護者が正しい箸使いができない比率は約20%であったことから、家庭のみで箸使いを教育すること

は困難であると推察される。したがって、幼保園などの教育機関や食育活動をすすめる地域社会などが一体となった支援の必要性が示唆された。

次に、正しく箸を持てる園児の家庭では、習い事をしている場合が多いことが確認された。久本ら¹⁸⁾の研究によると、子どもが習い事に通う動機として、「本人が行きたがっているから」の割合が高いことが示されていた。このことから、習い事をしている子どもは物事を意欲的に学びたいという姿勢があり、箸の持ち方についても同様の姿勢があるものと考えられる。このように、子ども自身の生活に関する意欲の高さも箸使いには無視できないものと考えられる。また、脳は幼児期に著しく発達するので、この時期に手先を動かす習い事や箸を使うことが発達に貢献する⁷⁾と推察されることから、両者に関連がみられたものとおもわれる。

園児の箸使いと家庭環境との関連の結果から、正しく箸を持てる園児の家庭では、食事の時間を楽しんでいることが確認できた。園児が食事を楽しみにしている要因は、保護者が園児の食べたい気持ちや食卓の楽しい雰囲気を創出し、尊重しているためと考えられる。食育で重要なことは、厳しい教育をすることではなく、褒めることによって園児が自ら学びたいという姿勢を引き出すことである。子どもにとって「褒める」というポジティブなフィードバックは、自分自身の行動が正しいということを大人に受け入れてもらい、それによって自分の存在価値の肯定や安心感を生み出すこと¹⁹⁻²¹⁾と報告されていた。今後、正しく箸を持てる子どもを拡げていくためには、保護者が食事中に箸の持ち方を学ぼうとする園児の姿勢を引き出し、食事をすることが楽しいと感じさせる必要がある。

さらに、正しく箸を持てる園児の家庭では、食事を残さず食べることが確認できた。箸はスプーンやフォークとは異なり、そのみで摘む、挟む、支える、運ぶ、切る、裂く、ほぐす、剥がす、すくう、包む、載せる、押さえる、分けるといった多彩な機能をもつ食具である⁷⁾。このような多様な機能を持つ箸を正しく持てる園児にとっては、箸の機能性を十分に発揮することが可能となり、それが食欲や食事の楽しさに繋がるため、食事を残さず食べることになったものと考えられる。このことも箸教育の必要性を示すものであるとおもわれる。

3. 箸使いができる保護者の食意識

保護者の箸使いと食意識との関連を検討した結果、

正しく箸を持てる保護者は食事によって家族の絆が強くなると考えている者が多いことが明らかとなった。箸は自然に持てるようになるものではなく、一定の訓練によって正しい技能を身につけるものである²²⁾。手間暇がかかる箸教育については、保護者が時間をかけて繰り返し訓練することを厭わない姿勢が大切となる。保護者が園児への箸教育を通して、楽しくコミュニケーションをとることで家族の絆が強くなると考えられる。

また、正しく箸を持てる保護者は、感謝の気持ちを育てるようにしていることが確かめられた。日本には、食べ物は大自然すなわち神々からいただくものであり、食事の時には神々に感謝の祈りをささげる風習があることから、食事の前に箸を手に取り「いただきます」と挨拶をすることが一般の家庭でも今なお残っている¹¹⁾。これに加えて、食育における感謝には、食べ物の生産、流通、加工および料理に携わる人々などに対することも含まれている。箸は食べ物を直接口に運ぶ食具の役割を持つので、正しく箸を使える園児の家庭では箸使いだけでなく、食事前後の挨拶やその意味を教えることで、園児に感謝の気持ちを育てるとともに箸使いの教育も行っているものと考えられる。

以上のように、箸を正しく持てる園児の保護者では、園児が食事の時間を楽しみ、食事を残さないようにするなど、生活習慣の基礎づくりへの保護者の適切な介入が認められた。また、箸を正しく持てる保護者では、家族の絆を大切に、感謝の気持ちを育成するなど、こころの育みを重視するとともに、園児への箸使い教育や食事を残さないで食べるといった望ましい食習慣づくりも実践していた。

本研究の限界として、箸使いを家庭、教育機関、地域社会、行政などの関連機関と連携した推進が必要であると考えられるが、本調査研究の結果に基づいた具体的な提案に関する検証は行われていない。今後、これらの提案の実践が食育活動として有効であるかの検討を行う必要がある。

V. 結 語

本研究において、園児の箸使いを通して家庭における望ましい食習慣の形成に寄与できることが確かめられた。子どもが正しく箸を持つためには、楽しい食環境をつくることの重要性が示された。箸使いの意義と役割を学ぶ親子揃っての箸使い教室や、箸コミュニ

ティ組織づくりなど、多様な食教育機会と継続的な実践活動の必要性が示唆された。

VI. 謝 辞

本研究の実施に当たりご高配、ご協力をいただいたT市12幼保園、T市子ども未来部子ども育成グループはじめ関係者の方々に深甚の謝意を表す。また、調査の実施、データ入力などをしていただいた2015年度栄養教育学ゼミナール生、小川莉奈、中村有里、米山菜摘、脇田瑠里奈の各氏に御礼申し上げる。

VII. 付 記

本研究は、第63回日本栄養改善学会（2016年9月、青森市）にて発表した。

本研究は、愛知学院大学心身科学部健康科学科および健康栄養学科におけるヒトを対象とする研究倫理審査委員会による承認を得た（第1507号）。

VIII. 利益相反

本研究に当たり、開示すべきCOI関係のある企業等の利益相反はない。

参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ：子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm (2016. 11. 22)
- 2) 農林水産省ホームページ：食育基本法, 平成27年9月11日 法律 第66号, http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/pdf/kihonho_28.pdf (2016. 11. 22)
- 3) エドワード・ワン：箸はすごい, 柏書房, pp.7-67 (2016)
- 4) 鄒徳純：幼稚園における文化習得に関する研究-幼児の箸使いを中心に-, 兵庫教育大学大学院 学位論文, 1-15 (2010)
- 5) 香西みどり：日本の米と食文化, 比較日本学教育研究センター研究年報第5号, 63-73 (2009)
- 6) 向井由紀子, 橋本慶子：箸（はし）, 法政大学出版局, pp. 143-324 (2001)
- 7) 一色八郎：箸の文化史-世界の箸・日本の箸, 御茶の水書房, pp. 195-233 (1990)
- 8) 一色八郎：箸, 保育社, pp.17-57 (1991)
- 9) 真下弘征, 向山玉雄, 榎本佳子：「箸の授業」をいかに創るか-小学生と大学生における箸づくりの授業実践-, 宇都宮

大学教育学部 教育実践総合センター紀要第30号, 307-316 (2007)

- 10) 向井由紀子, 橋本慶子：使いやすい箸の長さについて, 家政学雑誌 Vol. 28, No. 3, 230-235 (1977)
- 11) 一色八郎：日本人はなぜ箸を使うか, 大月書店, pp.86-212 (1987)
- 12) 広沢洋子：保育所における箸の使い方について, 日本保育学会大会研究論文集 (44), 124-125 (1991)
- 13) 上原正子, 大場和美, 加藤象二郎, 箸の持ち方・使い方の発達段階別の差異, 瀬木学園紀要 (8), 7-15 (2014)
- 14) 立屋敷かおる, 山岸好子, 今泉和彦：小中学生における箸の持ち方と鉛筆の持ち方との関連, 日本調理科学会誌 Vol.38, NO.4, 355-361 (2005)
- 15) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：平成22年度児童生徒食事状況等実態調査報告書, http://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/tyosakekka/tabid/1490/Default.aspx (2016. 12. 11)
- 16) 谷田貝公昭監修 村越晃著：子どもの生活習慣と生活体験の研究 教育臨床学入門, 一芸社, pp.77 (2009)
- 17) 赤崎真弓, 小清水貴子, 元田美智子, 松野絵里, 中路知恵, 林 明子, 小濱有里子：幼児期から学童期におけるこどもの食生活に関する実態把握-箸の持ち方調査を通して-, 教育実践総合センター紀要, No. 9, 129-138 (2010)
- 18) 久本信子, 三笠友紀恵, 金築優子：子どもの習い事の現状-性, 年齢, 居住地域との関連- 夙川学院短期大学研究紀要, 27, 29-51 (2003)
- 19) 高崎文子：乳幼児期の達成動機づけ：社会的承認の影響について, ソーシャルモチベーション研究, 1, 21-30 (2002)
- 20) 岡本夏木, 高橋恵子, 藤永保 (シリーズ編)：講座幼児の生活と教育 3 個性の感情と発達, 岩波書店 pp.47-77 (1994)
- 21) 青木直子：就学前後の子どもの「ほめ」の好みが動機づけに与える影響, 発達心理学研究, 第16巻, 第3号, 237-246 (2005)
- 22) 河村美穂, 高橋 愛：箸の持ち方と食生活との関連-小学校低学年における調査より-, 埼玉大学紀要 教育学部, 57 (2), 37-46 (2008)

(平成28年12月27日受理)

Factor related to chopsticks usage as kindergarten child's shokuiku behavior target

Chikara KITAGAWA, Tomoyuki WATANABE, Ayu MORIOKA, Kaori SUEDA, and Eiko SAKAI

Abstract

Aim : To clarify the relationship between chopstick usage by children and their home environment, lifestyle habit, dietary consciousness, and discuss how to promote their dietary education based on such usage.

Methods : The candidate subjects were 5-year-old children (206 kindergartners and 280 nursery school children) from 12 public or private facilities in one city of Aichi Prefecture. Of these, 404 children and their parents provided completed questionnaires without an inadequacy in any chopstick usage-related item or other missing data (response rate: 94.7%, effective response rate: 83.1%). An observational method and interviews were conducted to investigate the chopstick usage of children, and the questionnaires completed by their parents were collected by visitation. The questionnaire included 18 dietary habit-related items for children, and 44 dietary consciousness-related items for their parents. In addition, the obtained data were compared with data from a dietary education-related survey involving 5-year-old children and their parents, which was conducted in the same district during the same period.

Results and Discussion : 1. The numbers of children who could use chopsticks properly were low. 2. The parents of children using chopsticks properly taught them how to use chopsticks, the children were aware that they could use chopsticks properly, enjoyed their mealtimes, and dined without leaving anything. Thus, these parents intervened for their children in a manner enabling them to establish a basis for a healthy lifestyle. 3. The parents of children using chopsticks properly helped them to develop a desirable lifestyle: these parents placed emphasis on mental healthcare and family bonds, educated their children in a manner enabling them to have a sense of gratitude toward others, taught them how to use chopsticks, and ensured that they dined without leaving anything.

Conclusion : Dietary education aimed at promoting proper chopstick usage for children helped their families develop desirable dietary habits. The percentage of 5-year-old children who could use chopsticks properly was low (slightly lower than 30%) . This suggests the need for various educational opportunities and continued practical activities, such as communities targeting proper chopstick usage, and classes in which children and their parents learn about the significance and roles of such usage.

Key words: Shokuiku Behavior Target, Chopsticks Usage, Home Environment, Lifestyle Habit, Consciousness to Eating Habits